

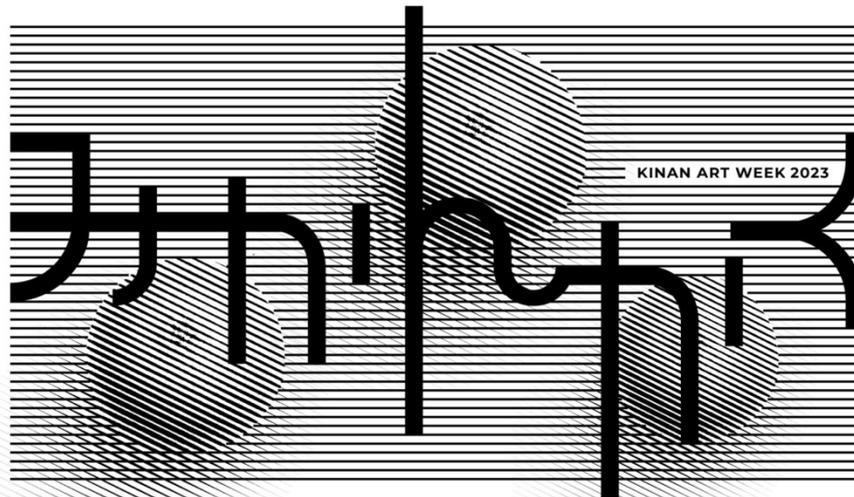
未完のみかん
—「みかんかく」を想像する—

2023年10月6日
紀南アートウィーク 藪本 雄登

1 「みかんかく」とは？

「みかんかく」は、みかん（蜜柑、未完...）+かんかく（感覚、間隔...）を掛け合わせた造語です。今回は作品を鑑賞する「展覧会」としてではなく、「みかん」を媒介にしながら、嗅覚や味覚、触覚、や時間感覚等に訴えるワークショップなどを中心に「みかんかく」展を開催します。

このきっかけを与えてくれたのは、白浜の Bar 九十九のマスターです。昨年、食のワークショップにおいて「五感を感じる・・・」という表記を見たマスターは「俺は『五感』という言葉が嫌いだよ。『五感』が備わっていない人はどうなるの？アートを扱う者が、そんな残酷な言葉を使っちゃいけないよ。」と言って頂いたのが、なかなか頭から離れませんでした。



触れてみたくなる？「みかんかく」のキービジュアル@colographical

2 「感覚／間隔」とは —視覚＞嗅覚、味覚、聴覚、触覚？—

『[目の見えない人は世界をどう見ているのか](#)（伊藤亜紗先生著）』によれば、人間が得る情報の9割は視覚情報に頼っているとされており、芸術／アートはほとんど視覚表現から成り立っています。思想・哲学的にも「視覚」の優位性が強調されてきた歴史があります。その意味で、今回の「みかんかく」展に登場頂くアーティストの廣瀬智央さんは「嗅覚」、トゥアン・マミさんは「味覚」、映画監督・岡野晃子さんは「触覚」といったように「視覚」以外の表現を重要視してきました。例えば、ミラノの廣瀬さんのご自宅に宿泊させて頂いたときには、その部屋には、本物のオレンジと彫刻のオレンジが置かれており、「視覚」のみならず「触覚」や「嗅覚」を発揮し、そのモノに触れて持ってみて、匂いを嗅いでみないと本物／彫刻のオレンジとの区別ができないように仕掛けられていました。

また、そのオレンジと手が触れ合うような「濃密な重なり合い」の場においては、まさに「『間隔』ゼロ（もしくは、『間隔』マイナス）」の状態がひらかれます。自分や他者の別け隔てが、曖昧になり、深みに入っていきような感覚を得るのは、私だけでしょうか。その「間隔ゼロ」から深みに入っていき状態を、紀南を代表する博物学者・南方熊楠は「直入（じきにゅう）」と呼んだのではないのでしょうか。

特に、熊楠は「触覚（tact）」を重要視していたと言われています。熊楠研究者・唐澤太輔先生の「[“tact”に関する哲学的考察—南方熊楠の言説から—](#)」によれば、触覚こそが根源的なものであり、まさ

に触覚のみで生きている究極の生物が「粘菌」でないかと述べています。本展を通じて、皆さんの「触覚」を粘菌のように稼働させてみませんか。



アーティスト・廣瀬智央さんによるワークショップ「[いちどためしてみませんか](#)」

3 「食べること」と「寄生／共生」

「食べること」は、なまやさしいことではありません。私達は「食」を巡って、寄生し合ったり、食い合っている緊張関係を無視してはいけません。今回、ベトナムからマミさんが紀南にやってきますが、彼のプラクティスは、ある種「食客／寄生」的ともいえます。『[食客論](#)（星野太先生著）』によれば、「食客」とは、いわゆる「居候」のことです。「寄生虫」のように宿主を出し抜いて、食事をくすねとって、宿主と食事を食い合う存在である可能性があります。マミさんは、根を切り離されたベトナムの植物／移民に焦点をあて続けていますが、私達は、「共生」する前に、傍らにいる彼らとともに「食事」を取り続けなければなりません。マミさんのアート・レジデンスや芸術実践を踏まえて、一文字違いの「共生」と「寄生」をどのように捉え返すことができるのでしょうか。



マミさんとラワンチャイクンさんの「[食](#)」に関するワークショップ

4 「蜜柑」と「未完」

最後に「蜜柑」については、もちろん、昨年の「[みかんマンダラ](#)」展の延長線上にあります。ちょうど2023年6月に『[未完の天才 南方熊楠](#)（志村真幸先生著）』が発売されており、同書の「みかんと神

仏習合」という章で、果樹栽培と神仏習合について述べられています（その内容については、是非同書を手に取って見てください。）。また志村先生は、熊楠の「未完」性を踏まえて、実は「完成させないこと」、「結論をださないこと」の重要性を問い直しています。この「未完」の思想は、近年の現代思想、哲学、人類学、芸術の世界においても重要な要素となりつつあります。

例えば、「共同体」論でいえば、イタリアの哲学者ロベルト・エスポジトは、私達は純粋な贈与である「誕生」の段階から決して返済しようがない負債を負っており、この「未完の状態」こそが、人を結びつける源泉であるとまで言っています。「未完の人・熊楠」に、やっと時代が追いつきつつあるのかもしれない。

さて、今年も「みかん」を媒介に、終わりなき「みかんかく」の旅に出掛けようではありませんか。

以 上